

季誌  
能古博物館だより



梅花先んじて占める一天の春、と活力に満ちた詩賛である。  
嘉永四（一八五二）五十四歳。この時期は少菜作品の世評益々高い。

亀井学を大成した

大儒 亀井昭陽伝（十四） 庄野 寿人

・生月鯨と亀井塾  
・昭陽・塾生増に追われる

明けて文政十二（一八三〇）年一月十四日、肥前平戸・生月島の益富家二統から初漁と考えられる鯨身の大量が昭陽に届いた。おそらく益富捕鯨業の上り船便に積合わせ都合も良かったのであろう。

益富家当主の又左衛門を筆頭に、分家の茂作、二之助、各人から鯨肉一卷（十斤包〓六キロ）に皮肉十尋（左右の手を延ばした長さを一尋という）をそれぞれに添える。また又左の長男で亀井在塾の駿太郎は肉一卷に皮肉を百尋、又左の長女婿まで上々肉身二巻が贈られたのである。

昭陽は豪勢な鯨身の到来に、新春縁起の良さに顔をほころばしたであらう。

大変なのは昭陽妻の伊智夫人である。大量の鯨身は適当な厚さに切る。幸い寒冬もあり、薄塩を加減して使う。年末にも益富家歳暮で届いた塩鯨の保存も相当にある。亀井家は当分鯨肉豊富である。

亀井書生たちは「亀井塾の鯨」を

前評判に聞いており、これらは亀井塾の定評にされていた。当時は牛肉以前で、肉食は鯨だけで栄養さも食品第一等にされていた。新鮮な鯨は、いまのスキヤキまたは焼肉ステーキにもされ、昔も変わらぬ最上のご馳走である。

伊智母は、すぐに今宿の少菜、姪浜の敬（五島屋）に配った。昭陽は雷首を呼び、刺身鯨で一献。これも当然にされよう。

帰省書生は十五日に帰塾であるため、全員揃った日に鯨食膳と、これも伊智夫人の予定となった。

二十日、昭陽は正月試筆を添えて今回の生月五人衆に謝状を出す。

廿四日、秋月の「原古処」廿二日逝去を聞き、鉄次郎と少進に葬儀奔走を命じる。

二月二日、生月又右衛門（又左衛門弟）から鯨一卷と黒皮これに長崎蘭館の水砂糖一箱が、妻の伊智に到

写真：杉山 謙

能古博物館だより

来。又右衛門は以前に約一年亀井塾に在籍していた。

昭陽は、以前の在塾生から妻への気づかいを見ると格別にわがこと以上に嬉しさと感銘を得た。

また昭陽は今年こそは正月帰省の書生が揃って、亀井塾に平常に戻った頃、妻に太宰府観梅と二日市温泉の宿泊入湯を考えていた。このことは、博多の松永子登からも、その実行を勧説されており、できれば別府入湯もよく、子登自ら別府宿の幹旋をするとまで云われていた。この昭陽の妻の別府入湯一ヶ月のことは本誌前号に詳述しているので、ここに再述しない。

昭陽の妻に対する気遣いは、ほかにも多々ある。亀井塾書生は遠地からの滞在留学が多い。これは福岡藩学問所がその入学を自藩士に限定、その授業内容は百年変わらざしかも道学(朱子学)に固定した世襲の学者による。このため久留米、小倉、長州藩など隣藩から亀井塾を志向し、また福岡藩内の医師、町役人、農村の庄屋師弟などは、亀井学が徂徠学をふまえ、人の情操に満ちた詩文、加えて実学性をともなう教学の内容を認識しての就学であったのである。

昭陽は、藩の西学問所廃絶と儒官

の職を免じられ、一般士として下級の番役を命じられる中で福岡藩領の烽火番士とされ、各地の烽火台に赴いた。これは思わぬ経験となり、また旧門人との貴重な再会に恵まれた。これは昭陽来るが一般に伝聞されると、その機会を得難いとして地域の亀井塾修了者に見舞と歓迎を受ける情景となった。彼等の多くは郷里と生家を離れ亀井塾の近辺に滞在、或いは塾寄宿生となった者たちである。期せずして旧子弟が当時を語るに、昭陽妻

に自分たちの母同様の心情に接した感謝を云わないものはなかった。これらは昭陽にも強い感激をともない、烽火台への険しい登板の苦勞も癒されるのである。



右五字の註いづくんぞ太古の心を知んや

昭陽の愛妻ぶりは学者間にもとり世間にもよく知られ、生涯に妻以外の女性を知らず、ただ終生酒をたしなみ妻と学問に徹し切った人物とされている。

また、昭陽の酒は外で泥酔するなどがなかったことも伝えられる。

なお、酒は必ず家である。著述で

疲れた後の酒が夜半に及んで、そのまま寝込むことも再三。また良い相手があると時のたつのを忘れ、そのまま暁方になることも多いが、酒で騒ぐなどはない。招待された時も自分で歩いて帰るを限度にしていた。

この点は父の南冥と大いに相違する。昭陽は控え目に己れの武士身分、その体面を守った。これも父と違い南冥の場合は武士を張った。例えば秋月往来など槍持ちの仲間を従え、書物なども自分で持たない。必ず書

生を従えるか小者を使うなど、威を飾った。しかし、酒が充分にはいると容儀もくずれ体面をはずした格好を演じたことが伝えられ、これらが多分に反対派の中傷に利用されて自らの失脚を招いた。

南冥の藩処罰が決定、また西学問所の焼失と亀井塾の受難が相次いだことで、亀井塾の塾生はわずかに六名という状態もあった。

再度にわたる亀井塾火災を経て、

百地新地とよばれる、いまの今川橋西畔に亀井屋敷と塾舎新築、昭陽の地味な教育がつづく。この間、実に廿五年。その前半十年は、南冥懲罰の連累として、昭陽の儒者罷免と平

士変替えが作用する。ために下級士として城門番、城内の巡回警備という番役に就かされた。また領内6カ所に設置された烽火番として十日間の山詰め、十日休務という任務を約三カ年つづけた。この番勤往復と山中籠居の苦勞も大きく、ために当番士約七十名の半数が病氣休務或いは退役という実情を呈し、皆勤はわずかに昭陽一人という結果が見られた。これには藩当局の対応も反省が生じ、昭陽の真面目さが大きく認識された。

このためか、以後、昭陽は一切の番勤から開放され、塾教育に専念できた。

これで亀井塾の経営に整然と充実が進展し、塾生も三十名から四十名に及び学塾の評判は高くなった。

昭陽を補佐する塾管理役は、少栗婿の雷首である。雷首も郊外の今宿に好音亭を称して学塾を持つ。妻少栗はとくに女性塾を併せ、これにも十名程度の女性塾生があり、その半分は別棟に収容する寄宿生であった。亀井塾は塾生の内容が、当初から

能古博物館だより

内書生（寄宿生のこと）と、近辺の民家、寺院に間借り自炊する外塾生がある。自宅或は縁類家からの通学生は総体の約半数である。

このほか、福岡藩士とその隠居で聴講生とされる数名、この人たちは、藩校修猷館の修了生であるが、徂徠学、とくに詩文の勉強を志向している。

昭陽は、この人たちを一般塾生を区分して教室を使わず、時間も別に決めて昭陽の書齋で教えた。これらは年輩の聴講生たちに良い認識を得て、亀井塾と昭陽に評判を高めた。こうして亀井家に対する一部からされる故意の中傷もなくなった。

とくに昭陽と少栗による一般の根強い人気表面化し、全国的な評判に好転した。このため昭陽の書に対する待望は、おもて立って依頼されるようになった。

いま文政十一年の昭陽『空白日記』から揮毫（書）依頼の実例を引いて見よう。

昭陽は、元旦まず自らと後嗣の鉄次郎が試筆を終える。その後は、年越しの書依頼を工夫しその仕上げに努めた。二日は、まず一番に昭陽が所属する城代組頭の衣非氏が藩主に乞われていた詩書四百字の清書にか

かる。これには寄宿書生の手伝いを得て夜おそくまでかかった。

（書生手伝いは墨をすったり用紙を揃えたりしたのである）

（以下、昭陽の日記分に戻る）

三日、副田太次平来たり、鯉節（おご）十丁（二は鯉の腹をい）小倉鮎一壺を受ける。太次平は豊前藤木村の大庄屋。若年時に二年塾生であった。

大鉄、道調

了順の三名来り各百五十匁を土産とする。

大池安兵衛門、柴田与助兩名来る。

酒五升、糖箱一を持参。

延太郎十二月廿二日の

書翰に銀方三枚（一朱銀三枚をい

う）同封、寒見舞とする。

四日、書生に詩文稿宿題を削訂して返す。今宿雷首から幸便に托し牛蒡と酒を以て正月に友也と紅児を鉄次郎が送った謝意が届く。太宰府延寿王院より神幡（タテ長、布のぼり）



寛猛の訓註＝ゆるやかで、かつ厳しいこと。

廣瀬青村の書  
青村は亀井昭陽に学んで逸材とされた。日田に帰り、淡窓に乞われ養子となり咸宜園をつぎよく名声を守った。

に書字を頼まる。安兵衛と三河屋助次来り講堂に於いて曲弦入り寸劇をする。家人、夜半過ぎまで娛しむ。五日、安兵衛来りお宮に共進する神幡一对の揮毫を頼む。清次郎妻の柚子持参に鯨肉を与え喜ぶ。権市、父南冥の書を持参、父の無落款に押印して返す。

六日、早朝に揮毫九枚を果す。書生の文稿を削る（削るは朱線を引いて訂書すること）。桂衛

（藩人）婦塾乾帖五十尾、内氏（妻のこと）に寸志一封を土産とす。仲珮、熊之進新折紙各一束。また仲珮金一両を健吉に托されて持参する。

七日、書生文稿を削る。俊民婦塾、方金と干鰯、干鳥賊、酒一樽（三斗）を持参。

明十郎来り銀（二）詩

稿削を乞う。鉄次郎『伝例五卷』を

輯す。鉄次郎『伝例』検了。吉甫

（広瀬旭莊）正月十日の書翰来る。

八日、左伝讀考に畦紙百枚を打ち、日記に畦紙二十片を補強する。御助、雲丹二包、駿太郎（生月益富家の息、

塾寄宿生）鯨皮身の干物一段（箱入）到来。俊民、病のため老州に帰る。

生月益富家より鯨皮身と腸の「薄火焼き」が大量に到来。妻は栄作（下男）を今宿（友・少栗のこと）

と姪浜（敬の五島屋）に走らせ、右の鯨物を分配する。この鯨食品は生身肉よりも好まれ、保存に耐えるので亀井家でも珍重食にする。（酒のつきだし）に最高である。

昭陽は正月以来、校訂や添削に追われ夜も遅くまで努めた。

九日、雀の鳴声で起きる、自著の『伝例』次序に追われ、少栗の援けを得ることになる。仲珮に請われ、十一日に左伝の講義開始とする。書生の作文と詩作も多くなり、その添削に昭陽は追われる。書生数は塾以来の最高三十九名。昭陽は四十名を超えると助講師を求めることで娘婿の雷首に相談するが、雷首の医業も

最近では多忙である。最近半年に一月、生月往診。その薬品製剤にも追われている。

十日、初めて雷首が、昭陽の「左伝」講を担当、論語は泰伯（上席弟子）の補講を得る。藩士の七太夫が来遊、ついに書字帖を請われ、次いで兄の左太夫も来り酒になる。この兄弟は黒田氏の一門で高禄を得なが

能古博物館だより

ら閑日多しというところで家老などの役職に就かず学は徂徠を好んだ。このため南冥以来の交際である。改めて宴席を別室につくり兄弟をもてなした。これに生月到来のくじらは大いに役立ち「腸の薄火焼き」は初物であると、おおいに喜ぶ。内氏はこれを別包にしらえ兄弟別々に土産とする。

今日は、この接客で、昭陽の「左伝讀考」の原稿は僅かに五枚半でとまった。こうした客で、昭陽の酒もほど良く、夕刻に入浴して寝む。

十二日、昭陽は所属の城代組寄り合いで組頭衣非氏屋敷に詰める。

昭陽は昨年末に什長（組士十名の長）を申し付かっている。衣非組頭の信頼も篤く昭陽への好遇がうかがえる。城代組士の役務派遣など昭陽は全免である。藩主から組頭依頼の昭陽揮毫なども早く組中に知られており組士たちに昭陽畏敬もある。組士の多くは東学修猷会に学んでいるが、亀井学排斥に理解と同情を持った者たちも多い。

十三日、書債五枚を努めたところに、又々達立寺僧が酒二升を持参し、字書を乞われる。

午後は親戚の月成氏（家禄三石）の家士五人、下士四人が来り、これ

に酒を提供する。相手が多勢のため昭陽も酒が過ぎ、ついに諸事に手づかず一日を終えた。

十四日、昭陽弟大壯（雲采のこと）の大祥日。このため少進は宰府の光蓮寺、福岡の浄満寺に昭陽代理として弔祭に赴く。両寺に各南金一方（一朱銀のこと）で十六を以て一両に換えると刻された銀貨のこと。これに六書生から酒一升が供えられた。これは大壮にいささかの知縁があった書生たちと思われる。

友が紅児を同伴して来る。

十五日、孤卿使某来る。（氏名を略す。おそらく黒田家一門の者で昭陽が記名を遠慮したと思われる）用件は、昭陽書字帖を求められたのである。

夜、塾生の左伝会を催す。

十六日、道佑（音羽菟菟）、忠吉（葛と松露）、太郎次（麵七把）、与八（焼麩）、島井俊蔵は酒を持参し書字帖を請う。鉄次郎が平士敬氏を招く。助次郎（葛茶一斤）、伊東只七妻（茶包）、助次妻（酒）、与次右妻（茶包と花）。以上は別に祭祀あり。午時から女客とする。敬が三児を同伴、これに二婢を従う。阿幹（おかん）、方城、長婿（雷首）も来る。（以上は昭陽の小さな集りごと

のようである）

十七日、長男の蓬洲法要。これに書生二十五人に朝餞を出す。諸客も続々と弔問に来るが、これは別記。なお昭陽の讀考稿は小休する。晩食に書生の相伴とする。

よって十七日の講義は休む。蓬洲法要に六十五人の弔問を受ける。

夜になって津田久次郎、手塚孫太夫が門を叩いて驂次郎（山口白賁の次男で昭陽の甥）の死を伝えてくれる。これに昭陽は鉄次郎に五書生を伴い伊崎（義弟の山口白賁宅）に往かせる。

十八日、午後は伊崎に会すが、此のところ疲労重なる。ために十九日講義を休みとする。

十九日、月成家の家従三十余人、また西部遊宴の帰途に寄る。少栗が都合よくあしらう。山口白賁来る。

二十日城代組の隊伍会もあるも出席すぐ謝して帰宅。久次郎、生民来る。憲蔵が焼雉を持参。

廿一日、鉄次郎、月成氏に行く。夜、左伝会講する。十六日以来の日記多忙による疎あり、一考を要す。本稿もまた記事疎末が多いので二月まで記事を省略する。

三月  
朔日、明け六ツ（午前六時）聖像

に礼拝する。岡本又左衛門来り酒名飛梅をもたらず、書生、南金四片（金一両）廿五人の志を蓬洲に奠す。

二日、先考即世（死去をいう）十四年となる。葉西平蔵、孝筭三本を奠す。書生三座廿九人に膳、これに源吾（雷首のこと）加わる。生民も奠す。夕刻、吉甫（広瀬旭莊のこと）来り漬菜一壺、果一箱を奠す。広卿（淡窓のこと）書翰をもたらず。

三日、賀を停す（節句を止める）山川三省、昨入塾するも今日引見するに南金二（二分のこと）酒二升を出す。広瀬久兵衛（淡窓の父）秋風集序を乞い方金三を受ける。日田より二生の酒二升、鯛二、吉甫と酒を酌む。内氏、宗也を拉して敬氏に往く。縁談取りまとめか。春甫生入塾。

四日、龜齡軒来り酒一、茶二袋、字を乞う。夜、徂徠集を会す。

五日、以風、南金により字を求む。秋風集に序を揮い、殆ど勞すも序不作。

六日、吉甫を呼んで午飲す。見哉その子而立を以て入塾を請い、海鮮三、酒二升、生月の又右衛門より酒一樽、鯨粕漬来る。左伝会に、秋月の養齋、紀四郎（雷首の三）参会。

七日、春甫、三省帰郷。莊太郎、建立寺法龍来り午飲す。

# 老莊を聴く

安 陪 光 正

## どんぐり

四月から始まった老莊講義も、十二月二日で九回を重ねた。船上から望む能古島は、左岸の民家の上に雑木黄葉がまだ残っていた。船が港に近づき永福寺の大銀杏をさがしたが、すでに散って冬木となり、見事だった博物館の桜紅葉もはや寒林となっていた。船を降りていつもの細道を登ると、石段のあちこちに椿の実がちらばっていた。黒褐色で少し角張ったものもあれば、割れた殻の中に頭をのぞかせるものもある。この実から搾った椿油は、食用に或いは髪油に供された。海をへだてた正面の油山は、天正年中唐僧清賀上人が、この山の椿から油を搾り、灯火に用いることを教えたことに由来する。

博物館の門を入ると、左右の土手

るとき、落ち葉に散った木の実をみると、大小形のちがった二種があり、大きい方は径約二センチ、球形でお椀のような殻斗をつけたものもあれば脱いだものもある。も一つは長楕円形、径約一センチ・長さ二センチで殻斗と共に散らばっていた。いずれも上半部が茶褐色、下半分が淡褐色、掌上にのせて眺めていたが前者は榛、後者は小楢の実、だるうとあたりを見廻した。樹木を仰ぐと、雲をバックに夜叉又五倍子の黒い球果が枝間にちりばめられていた。何時来ても、この径は四季それぞれに心を和ませる。

## 義に死す

今回は莊子の人間世篇の中で、孔



林間の小径を楽しむ受講生

子の二大戒・天殺の人と如何に対するや・榛社の樹・支離疏の寓話などが講ぜられた。

孔子の二大戒、命と義について述べられた。命は人が生まれながらに運命づけられた親子の如き関係、義は社会生活における君臣の關係におけるような戒である。私はこれに聞きながら二つの話を胸に浮かべた。一つは、義のために死んだ伯夷・叔齊、叔齊は殷の処士、孤竹君の子、伯夷の弟である。父に自分を世嗣ぎにする心が

あったが、弟であるというだけで受けなかつた。また周の武王が殷の紂王を討つにあたって、伯夷と共に、臣が君を殺す

不可を説いて諫めたがきかれなかつたので、周の粟を食うを恥じて首陽山に隠れ、わらびを食って餓死したと伝えられている。

わが国で義の為に死んだ者としては、赤穂義士があげられる。彼らは

元禄十五年十二月十四日、江戸本所の吉良上野介郎に討ち入って、主君浅野長矩の仇を討った。ために三〇〇年を経た今日、今なおその名が高い。ちなみに我が家の近くにある穴観音（興宗禅寺）に、東京泉岳寺の赤穂義士の墓そっくりの墓地を作り、毎年十二月十四日に義士祭が盛大に行われている。

また近くは大東亜戦争に命を捧げた将兵三〇〇万は、君のため、国のため、義のための名の下に戦場に散った。儒教は、五世紀中葉わが国に伝来し、以来長く我國の国教的存在となり、我々もまた儒教を根幹とする教育を受けた。君に忠に、親に孝であらねばならないと、日常の行動を自分以外のものに規制されて育った。戦争を否定することも批判することも考えず、世俗的道德（忠や義）をこえて、内なる己が心に従って行動することを知らなかつた。すなわち儒教は、封建的・帝国主義的体制に好都合であつたし、それが利用されました。

## 螳螂の斧

衛の靈公は天性の殺伐狂暴（天殺）の人、天がその徳を殺ぎ落としたかと思わせるほどの人物で、その傳となる顔闔の話である。話の中で、我々

がよく知っている「螳螂の斧」が出た。

「汝は夫の螳螂を知らざるか。其の臂を怒げて車の轍に当り、其の仕に勝えざることを知らざるなり。其の才の美れたるを是る者なり。戒めよや、慎めよや、而の美れたる者を積え伐りて以て之を犯むれば、幾し」

ついで虎を養う猛獣師の話が出る。彼は虎の怒心が出ない様に、生きたままの動物を与えない、また死んだ動物でも一匹のまま与えない。それは肉をひきさいて、食べる時、怒りの心が出て気の立つのを恐れるからである。彼は虎の腹加減をはかって、食べる時に怒心が起こらない様に飼を調える。人も虎も同じで、その本性に逆らわれないようにすれば、自分を養うものになっていく。天殺の人の霊公には、そのような心掛けで対応すれば禍をうけることがないであろうという。自分の才や徳をほこって彼をいさめると、「螳螂の斧」のように車の輪にひき殺されてしまうぞと戒めている。

次に石という大工の棟梁が齊の国にゆき、曲轍という所で社にそびえる様の大樹を見た。その木は巨大で、十仞の高さで枝がつき、船が作れそうな横枝が十数本も伸びていた。し

かし石は此の樹をふりむきもせずに行ってしまった。弟子たちは、「こんな見事な樹は見たことがない。どうして先生は見むきもせずに行ってしまったのですか」と尋ねた。石は、「あれは役にたたぬ木（散木）である。これで船を作れば沈み、棺槨を作ればすぐに腐り、器を作ればすぐに毀れ、門や戸を作れば脂がふ

き出し、柱となせば虫が食う。これは使いみちのない木である。このように役立たぬ木であったればこそ、こんなに生きのびてこられたのだ」と答えた。役に立つ木（文木）なら切られて材木となるが、役立たずの散木は切られることもなく天寿を全うすることができたのだという。

次は支離疏の話である。支離疏はひどい佝僂であったが、裁縫と洗濯で毎日食ってゆくことができた。箕をふるって米をふるい分ければ、十人ぐらいいは養える収入であった。戦争がおこって兵隊を徴集するとき、彼は佝僂であるため兵役をまぬがれ、病者に穀物の施しがあるときは、その割りあてをもらうことができた。そんな片輪者でさえ、その身を養い天寿を全うすることができる。まして精神的な徳を片輪にする者、すなわち儒教的道徳を問題にしない人が、

天寿を全うしうることは言うまでもないことである。

それぞれの寓話は、義に死することよりも己の心に従って生きること、殺伐狂暴の君主に対しては「螳螂の斧」にならないように、また有用よりも無用の用をとすすめている。

### 天年

我々の青年時代は、その多くが戦場に散り、少なからざる青年たちが結核に倒れた。すなわち天年（天寿）を全うすることが困難な運命にもあそばされ、今のように平和な時代ではなかったのである。莊子は、死生を自然の理法と見做したが、それは夜が終わって朝が始まるのと同じで、人の意志や努力では如何ともすることができないもの、人間の力を超えた宇宙的意志によるものと考えた。仙厓戯画の中には老荘的なものが少なくない。先日見た戯画の賛に「鶴は千年、亀は万年、人は天年」というのがあった。この天年という言葉は『莊子』の中によくみられるが、仙厓もまた老荘に親しんだ人であろう。

莊子が生きたのは、西暦前三〇〇年頃、それは古代中国の戦国時代で、秦・齊・燕・楚・韓・魏・趙の七カ国が中原に覇を競い、殺戮に明けく

あった。多くの若者が戦いに倒れ、老人や婦女子が飢餓に泣いた時代である。不安と恐怖、絶望と悲嘆、常に死と隣りあわせに生きた血なまぐさいこの時代から、莊子の哲学が生まれた。生きることが至難であったこの時代は、自分の運命をよしとして受容し、それと一体化してより高い境地を旨とす外はなかったであろう。人類の歴史は戦乱の歴史であり、身近には文化大革命に翻弄された中国国民がある。

日本は敗戦後五〇年、明治以来こんなに長く戦争のない時代はなかった。戦中戦後を思えば、今の衣食住は王侯貴族の生活である。平均寿命も著しく延び、男性は八〇に近づき、女性も八〇を超えた。人々はまさに天年を全うできる時代に生きている。しかしながら長命である幸の裏に、痴呆という禍を背負わなければならなくなつた。今や八五を超える女性の三人に一人、男性の五人に一人が老年痴呆となる。核家族化した今日、元気な老人は「長生きしすぎた」としきりに口にする。莊子に今の日本の老人社会を見せたならば、彼は何かというだろうか。

（人間世篇の通釈は、福永光司著、莊子朝日新聞社、昭和三十一年、を引用した）

## 陣笠の話

付して祖父を語る

庄野寿人

いま館の4号展示室に、昔の陣笠七点が飾られています。

陣笠というのは、ご存じの方も多いでしょうが、平べったく、一見して軽く、しょうしゃに見える武士の笠です。天上（笠表のこと）には、わずかに金の定紋が一つあって総体は黒漆塗りです。裏はほとんど朱塗りが多く、中には総金張りの派手なものもあり、陳列に一つだけ金紋入りのないがありますが、これは私の祖父使用のものです。

金紋がないということは、殿様の参勤交替で江戸上りなどの供行列などの公用には使わず、専ら自分の私用外出に使ったものです。そのため笠の表には図案的な「北斗七星」を淡い黒漆で総体黒地の中で一寸目立つ浮模様を作っています。笠職人に特別な注文をしたものでしょう。

殿様行列に家来が陣笠を頭上に隊列を組んで整然と歩行する姿は美事に見られます。

第27号  
(7) これは陣笠公用の最たるものです。行列の家臣には、各々の従者が身

分に応じて付きますが、これらは隊列の後方に従い、この者たちに陣笠使用は認められません。まず、行列の先頭から殿様籠か乗馬の両側から隊列の中間までは陣笠がつづきます。陣笠が一つの形式と格調を持って見せる情景です。

陣笠の効用は、日よけが第一ですが、少々の雨でも衣類の雨よけになります。雨が激しくなると、一行は供頭の指図で歩行を止め、武士たちは自分の従者に担がせた「お挟み箱」（両端に箱をつけ棒で肩に担う道具）から雨合羽を取出して着用し、また腰の両刀には柄頭に柄袋を付けます。

祖父の遺品は、この陣笠と兜、刀、これに槍二本、巻紙七十纏の筆蹟と系図三冊のうち一冊は自分代まで書き次いだのがあります。

祖父は、先祖代々から当主が使う通称名「半太夫」を名乗りますが、本名は十一郎です。この半太夫名を安政年間に藩の長崎警固の番頭となつて、長崎での写真に「庄野半太夫」と署名しています。また、維新後に武士まげをおろした上半身姿の写真二点を残しています。

祖父は、私が小学校に入学するまで健康でした。かなりの長身で八十

歳で背筋も曲がらず、私が小学生の時にいまでいう結核症？で長期療養したことがあり、病床を離れてからも栄養注射のため通院をつづけますのに、よく私の手を引いて病院通いをしてくれました。そんな時によく「昔のさむらい話」をせがんだことがあります。子供の幼稚な質問ですが、祖父に「人を斬ったことは？」と聞くのに「そんなことはない」。斬り合いをしたことは、には「斬り合いはしない」など、私が考える祖父の武士イメージは全然はずれてしまふのです。しまいには、おじいちゃん本当にさむらいだったの、と質問したのに「そうだよ」と答えてくれるだけです。

祖父は、天保十一（一八四〇）年生まれますから、まだ武士社会は確固としていた時代です。参考までにわが家のことを少し述べると、昔は豊前の宇佐宮神領の代官です。宇佐領というのは再三にわたつて戦国大名の大友氏の侵略を受けて領土を減らしますが、その中で神領代官というのは随分と苦労が多かったと思われます。

天正十四（一五六〇）年、豊臣秀吉の九州征伐後の黒田氏が大名として豊前に入国すると、すぐ黒田孝高に任せ

関ヶ原戦後の慶長五（一六〇〇）年に黒田家の筑前入国に従って福岡に移りました。以来、明治維新まで約三百年間の黒田家臣でした。家禄は、黒田家の豊前時代は一五〇石、その後が増減をくりかえし、江戸初期から明治まで家禄五百石を守ります。屋敷は中央区の赤坂で、福岡藩の諸士屋敷割り「百石当り参百坪」によって一、五〇〇坪余を屋敷地としました。家の記録は相当に残っております。

幸いに屋敷図が、昔のままに残っておりますので、御参考にごらんいただくよう、本稿の末尾につけます。父は七歳の時に、祝い膳を前にすわり、祖父から昔は今日から刀を差すことになつていたと小脇差をもらった話をして、刀も一緒に残しておくよ、と語り伝えてくれました。

先祖に、切腹した人が二人おりますが、家に改易（家をとりつぶし家禄を失う）がなかったのは重大な過失ではなかったと思われまふ。或は本人の自責であったか、とされるのですが詳しい記録にされていません。しかし、こうした先祖のことは、しっかり心に残って、厳しい武士社会を思わせます。

もう少し、私が成長していたら、もっと詳しい話を祖父に聞けたのに

能古博物館だより

と残念に思います。

祖父は、同藩士の斎藤左衛門の二男で、わが家の養子です。斎藤家は家禄五百二十石、まずは家格も同格というところです。斎藤の屋敷は旧電車通りから西公園に向かう右側の角屋敷で裏通りまでの一角を占め、庭内の池で泳げるほどの広さがありました。

祖父が亡くなってからも斎藤家にはよく遊びに行きました。それは池の魚が目的です。ひとりで池に入り、鯉、鮒を手綱ですくい取りしても叱られないと分かっているから、次第に増長し、ついにバケツ一杯の収穫を得ました。意気揚々とわが家を持ち帰って、母から叱られる始末でした。

また、わが家には魚を放す池などありません。結局、畑に埋めるという子供心に情ない思いをしました。大正末から昭和初め、まだ西公園下の荒戸町一带は、千坪に近い屋敷家ばかりでした。

各家の堀内には、ほとんど竹藪があり、皆さんおっとり話されて気さくさがうかがえるのです。これにはきつと武家風が残っておりながら、各自が肩を張る時代から解放されて自由と気軽さが出始めたせいであろうと思います。それも戦前のこと

です。戦後は、急速に各家とも広い屋敷地を小さく区切って分譲が始まり、アツというまに昔風の屋敷と生活も変わってしまいました。

わたしも、祖父の年代をいつのまにか越えています。すでに親戚にも祖父を語り合うこともなく、ただ私の心の中で勝手に祖父を思い出しております。

祖父は大正十一年に亡くなりますが、祖父が病床についていたこと、その死去についてが私の記憶にあります。葬式で親族一同が揃った写真が残っています。その最前列に私が袴を着けてチョコナンとすわり、あまり悲しさを見せておりません。きつと親族中のおじさん、おばさん、それに同年輩の子供たちが揃って、遊び仲間がふえてわが家の賑わぎやいを嬉しくしたせいでしょうか。

祖父の筆跡を見ると、いまの私がおじいさんの字は素晴らしいと実感しています。祖父はわずかですが、私の記憶に残ってくれた貴重で立派なさむらいです。

不幸にして、おばあさんの記憶は全然ありません。おばあさんが亡くなってからの、祖父でした。ここで、昔の祖父と、いまの私の

境涯を考え合わせるのです。

(昔の写真)

半太夫が、長崎警備の半隊頭とされた現地での写真(廿二歳) 原版は小ガラス。安政、万延、文久という幕末激動の時代ですが、案外と悠長に見えます。髪は、当時月代を毎日剃るのが面倒で流行の総髪髻そうはげまげにしています。

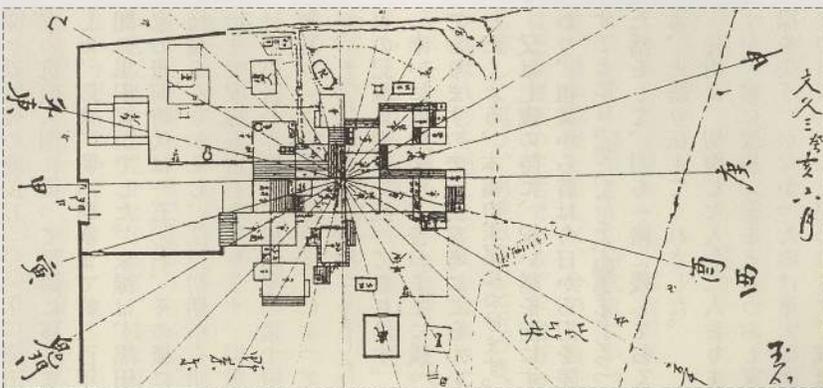


(晩年の祖父)

大正十年前後、八十歳に近い年頃で、筆者がなじんだ顔姿です。



(屋敷図) 原図はタテ74、ヨコ98cmの大きさ。これに約1、700坪の屋敷門口から玄関まで20m、この間に馬屋2棟、下男住居と小屋、物置棟があり、母屋は中心から左右2区分となり、主人が右列、女、家族は左列に分かれ、湯殿便所も別になります。



庭に離れ棟、蔵、稲荷社の別建あり。

## 伊能忠敬の能古島測量

有名な「伊能忠敬の全国測量」は、幕府によって、測量予定地にされる各国々の宿駅、村々の庄屋、名主らに各藩に於いて先触れ示達を行うことが通達されている。

その指示要点は、次の通り

○一行の人馬等に支障ない通行を期せよ。

○海辺ならびに島々には渡場に船用意等差支えなくする。このため地元役人は万端の案内と助勢をすること。

○一行の上下十八人の宿泊を用意する。その賃銭、米代は定額を支払う。よって一汁一菜の外に馳走がましいことは無用とする。

○人足八人、馬七疋、長持運搬人若干を揃えおくこと。各庄屋は村絵図を持ち案内する。測量器具（天体観測器）の据込み地十坪を適所に用意すること。

○一行十八人の宿所は、余り分散しないようにする。

○詳細の先触れは、順送りに先々え伝達し、肥後熊本に留置く、一行が着いたとき返すこと。

一行の服装は、全部股引き・草鞋

がけであった。酒も飲まず、夜間観測や製図などの作業をするので夜食も食べなかった。ただ菓子だけは好んだという。

九州における一行の身分氏名は、次の通りである。

伊能忠敬は、幕府天文方「高橋作左エ門」の手付で幕府測量方。

坂部貞兵衛は手伝勤方。

下役は、下河辺政五郎、永井要助、青木勝次郎（絵画師）。

忠敬門弟の梁田栄蔵、上田文助、箱田良助の三人。

付侍として成田豊作、松井沢治、恩田藤吉の三人。

竿持は平助、長蔵の二人。

ほかに中間五人で一行計十八人となる。

忠敬の測量日記によって、能古島測量を写す。全文、原文の通り

以下（ ）は筆者の注

文化九（二八）三年、八月九日晴天、両手一同六ツ後（午前六時）姪浜宿出立、同所より乗船残島を測る。我等、坂部は直に今宿に行く。（残島測量の開始）

今泉、尾形、箱田、佐助、善蔵筑前国早良郡残島字江

ノ口人家前より初め、右山に測る。字西浦・字白鳥崎・字カントン鼻・字荒崎鼻にて両手合測、一里〇五丁五十一間五尺、永井・浜谷保木・善七、残島字江ノ口人家より手合、左山に測り、字城ヶ崎・字北浦・字荒崎鼻にて両手合測、一里〇三丁五十五間五尺五寸、残島一周、二里〇九丁四十七間四尺五寸。（以上で残島測量を終わる）

それより乗船、中食、地方へ渡り又

手分、永井ら、門谷・保木・甚七・早良郡下山門村海辺（以下略）

残島測量は半日で終了。乗船、中

食、この中食は船中のようなのである。

地方（陸地のこと）へ渡り又手分、

永井ら、門谷、保木、甚七・早良郡

下大和村海辺、八日残神印より初め

順測、志摩郡青木村字長垂鼻と、実

に精力的な活動というほかはない。

伊能忠敬（二五）（二六）は、下総国

佐原村の篤実な名主（庄屋のこと）

で、四十七歳で隠居、翌寛政七年五

十歳で発心して江戸に出る。若い幕

府天文方の高橋至時の弟子となつて、

西洋曆学と測量術を学んだ。

五十一歳から七十一歳まで、十七年間にわたって全国三万五千キロを歩きつづけ、日本ではじめての正確な地図「大日本沿海輿地全図」を完成するという偉業をなした。こうした美事な後半生、真に壮大な仕事を後世に残したのである。

しかも彼は、決して頑健な体格ではなく、年毎に深まる老いと、痔や痰咳などの持病に苦しみながら、この大事業を成しとげた。遺言はただひとこと「恩師高橋先生のお墓の側に葬ってくれ」と。

これにも頭がさがる思いがする。

（付記）

私共が永く使っている全国地図で

あるが、その地図名の「大日本沿海

輿地全図」も、伊能忠敬の命名が、

現代に通用していることを嬉しく思

うのである。

「伊能図」の正確さも、明治以後

に他の測量法によって立証されている

ことを知り、快心を加える。ただ

新しい道路、鉄道、それに土地改良

による多少の変化等は否めない。

以前に、西南大生が当館に於ける

平成三年度学芸員実習に実施した、

「伊能忠敬測量の検証」の結果は近

代測量によるもの正確であると認証し

た事実を付け加えておこう。



て父の書齋、書庫の整理は、すべて少栗依存であった。これらは、書生たちに求めることも困難で、長次男の弟たちは、未だ成長期で望むべくもなかったのである。

それにしても少栗は、好音亭の住み心地に忘れ難いものがあつた。夫が亀井家、とくに父昭陽の実情に理解を示した積極さには、感謝以外にない、これが自身の決断になつたといえる。

少栗は、自分たちの生活が亀井家に戻るにしても、夫妻の起居が、好音亭によって、わずかに自前の一家を持つという切ない夢を果たし得たのである。

好音亭は、さらに四年後に、父昭陽の勧めもあつて夫妻の今宿移転に又々移築されるが、さすがに夫雷首が、自分たちの新居を考えて、建物の材料もよく、なにより夫妻の愛着が強かつたと思われる。

少栗は、結婚後の一年過ぎ頃から好音亭の書齋を教室に、論語を中心にした儒教、これに女子の習字指南を始めた。この習字教室は、やがて儒学を併せて別棟の女子寄宿舎を考へたが、これは右に述べた夫妻の亀井家移住によって消える。

さて、少栗結婚の十二月十七日に

話題を戻す。

結婚すぐに正月を迎える。少栗の日々は正月準備のため夫君実家の手伝いに従う。多勢の女中と小作人とその妻たちとも一緒に従い、広い屋敷の大掃除に始まり、餅つきの用意から餅の贈答と持参の挨拶、その配分する先々も多い。すべて少栗には初めての経験である。

亀井家では使用人と書生たちで自家消費の餅をつく。これに加えて書生の家元から贈られる餅も多く、いわば貰う立場であり、少栗が手伝うこともない。

こうした婚家の実情は少栗母にはよく認識されていた。そのため少栗に見舞いの便りと夫君雷首に言葉のことづけのほかに衣類、雑品なども再々托すのである。

少栗は好音亭住まいであつても夫君の家の手伝いは欠かせず気を抜くことがない。このため少栗の実家帰りも勝手にできない。夫雷首は亀井家の医局と亀井塾の昭陽補佐として亀井出勤、その泊りが多い。

これに加えて二・三月と九・十月には生月島益富家の主治医を果たさねばならず、これに常時の服用薬は亀井医局で調剤して定期発送を欠かせない。

- 庄野 直彦(直方)④・原田 國雄(宗像)⑥  
 森光英子(久留米)②・西喜代松(北九州市)⑤  
 永井 功(北九州)②・花田加代子(遠賀)④  
 本村 康雄(三池)②・中山 重夫(唐津)③  
 緒方 益男(佐賀)⑤・七熊太郎(佐世保)④  
 七熊 正(佐世保)④・浦上 健(長崎)②  
 田中 貞輝(愛媛)①・小堀 定泰(滋賀)③  
 伊藤 茂(神戸)③・西村 俊隆(東京)⑤  
 白水 義晴(東京)⑤・早船 洋美(東京)②  
 翠川 文子(埼玉)②・石野智直(東京)④  
 多々羅幸男(千葉)⑤・江崎正直(東京)⑤  
 ⑤ 会員ご氏名に⑥は、会費ご継続六年目をいただいたりするしです。  
 ( ) は多年分のまとめお払い込み、( ) は増口数ご負担を示します。

【法人協賛会員および特別協力法人】

- 九州 電力 株・大野 茂(福岡)  
 株 新 出 光・出光 豊(福岡)  
 出光興産福岡支店・山本繁弘(福岡)  
 株 福岡 中央 銀行・山本敬一郎(福岡)  
 株 福岡 南川 病 院・南川勝三(福岡)  
 法人 南川 整形外科  
 日本製粉株 福岡工場・白尾嘉弘(福岡)  
 福岡県警備業協会・村上五一(福岡)  
 流通 共 済 株・花田積夫(福岡)  
 タイム社印刷 株・安部博満(福岡)  
 株 笠 組 株 忠 夫(福岡)  
 博多ちくわ・株 魚 嘉 松 尾 嘉 助(福岡)  
 権藤税理事務所・権藤成文(福岡)  
 協 通 配 送 株・平野孝司(福岡)  
 大 牟 田 運 送 株・本村康雄(福岡)  
 株 三 島 設 計 事 務 所・三 島 庄 一(福岡)  
 日 西 物 流 株・原 重 則(福岡)  
 西 日 本 急 送 株・原 重 則(福岡)  
 愛宕建設工業 株・野村六郎(福岡)  
 東洋特殊機工 株・西尾敏明(福岡)  
 西尾トラック運送 株・西尾秀明(福岡)  
 南受光ビルサービス 株・野田和禧(福岡)  
 南ククリン 開 発 株・野田和禧(福岡)  
 延 寿 産 業 株・池田邦夫(福岡)  
 九州三菱ふそう自販 株・宮崎慶一(福岡)  
 南 安 河 内 商 店・安河内紀男(福岡)  
 木原税理事務所・木原敬吉(飯塚)

# 能古博物館の会

※新規の御加入(先号以後、平成八年一月三十一日現在)は、右の地区ごとに記載いたしておりますので、何卒御芳名を御確認下さい。  
 友の会 年間3千円  
 (館)の活動、館誌購読と催事企画に参加  
 自然と文化の小天地創造

協賛会(個人)年間1万円  
 (法人)年間3万円

【館維持、資料収集、施設整備等の資金援助を受ける】

納入方法 郵便振替 017309160970  
 財団法人 能古博物館

右の会費受領は、その都度本誌に掲載以後会費相当期間を名簿にします。

## 図書出版

### 『閨秀 亀井少栗伝』

詩、書、画の作品で仙居の次に多いのが同時代の亀井少栗。しかも少栗には艶麗な漢詩の恋歌まである。これが同女の作か否か、これに始まる探究の書である。

B5版・表紙布装美本

限定 二、〇〇〇部

図録全カラー50頁・本文94頁  
 直売頒価 三、〇〇〇円(送料 三〇〇円)

### 『江河万里流る』

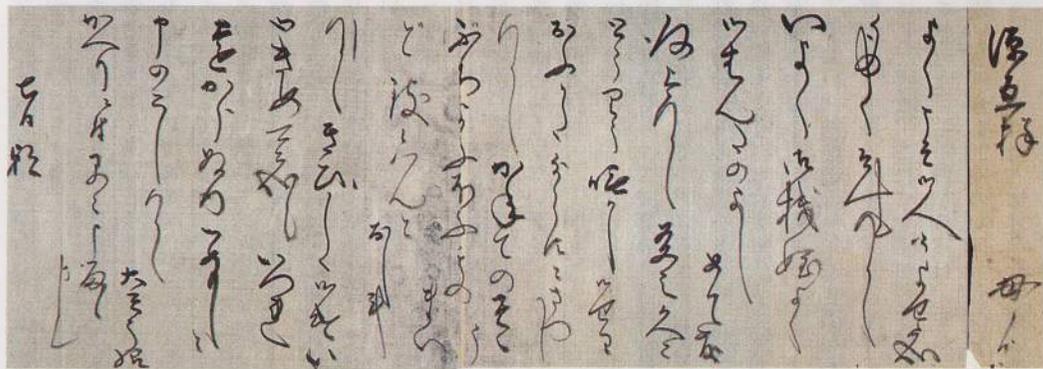
九大もとより東洋諸国の大学教授をはじめ、中国哲学専攻又は愛好同士によってさらなる孔子学の歴史と精神が集約された奇稿三十一名の論文集成として貴重な文献。また、平易に親しめる儒学精通書。

B5版・本文328頁

限定 二、〇〇〇部

直売頒価 一、五〇〇円(送料 三八〇円)

少稜結婚から翌々月の二月七日、母いちの少稜を思う、母だより



源吾様 母より

よくこそ御人およせ成され  
おめてたく存上候  
いよいよ御機嫌よく  
御はんたのよし

めでたく

存じ上げ候 友之(少稜の名) 久々  
とうりう 嘸々(さざざ) 御せわ  
おふかたならずと さっし  
かねてのそよう  
ぶちようほふもの

まい

ど 致し候わんとおしはかり  
申し候 きびしく 御遣い  
おきめ成さるべく候 いつれ  
遠からぬ内 御めもしと  
申しのこし候 大そう様  
かへりに付 早々申留候

かしく

七日朝

(註) 母「いち」は少稜を見舞いたいが、  
それも気ままにならない。右の母だ  
よりは源吾宛であるが、少稜への切  
ない気持ちのうかがわせる。

2 末文の「大そう様」は、昭陽弟の  
大壮のこと。本人が帰ると立ちかけ  
ているので、自分の手紙を打ち留め  
ます、の意。

(編集後記)

館内案内と運営

「梅一輪づつのあたたかさ」  
文字通り日増しに感じる季節  
です。

寒中でも、まず風がないこと、  
これに雲間の薄日でもあります  
と、お蔭さまで、御入館をお見  
受けできます。

これに、土曜日は中哲講座の  
御受講があり、館もピンと張り  
が出るのです。

土、日と国民祝祭の休日には、  
理事の南さん、協賛会と中哲講  
座お世話役の上田さんが本務の  
お勤め休日を、こちらに御加勢  
いただき、とくに御入館の皆さ  
まに、域内すぐに始まる(史跡)  
七連房の登り窯遺構とその製品  
残片と窯道具、次で孔子聖堂を  
経て、本館の展示品について説  
明を熱心に御協力を得ておりま  
す。

これは、皆様からお電話やお  
手紙で「親切な案内と説明を  
いただき、縁遠い昔の学問、ま  
たいまどき難解な書と字の内容  
まで気持ちにとまり、帰りの船

と車の中で記憶をくりかえしま  
した」など、感謝を頂戴します。  
これらは館長共々職員もこうし  
た新しい刺激と感謝を受け、と  
かくマンネリになり勝ちな気持  
ちに姿勢を正されるのです。

いま、リストラという言葉をよく見聞しますが、館は館長(兼学芸員)以下女子職員二名つまり常勤三名にパートさん二名で小館ながら広い境内を守り、一生懸命やっております。

これに前記のような御加勢や、友の会はじめ熱心な方々に特別催事には御支援をいただいでいます。

・能古博物館ご案内・

開館 9:30~17:00 (入館16:30まで)  
休館日 毎週月曜  
(月曜日が祝日の場合は次の日)  
12月29日~1月3日  
入館料 大人300円・中高生200円  
交通 姪浜 能古行渡船場→フェリー(10分)  
→能古(徒歩5分)→博物館  
〒819 福岡市西区能古522-2  
☎(092) 883-2881・2887  
FAX(092) 883-2881